

研究紀要

自ら課題を見つけ、
仲間とともに解決する子どもの育成
～学びに火をつけるESDの視点に立った授業～



平成28年11月15日（火）

名張市立蔵持小学校

I はじめに

平成 32 年度に全面実施となる次期学習指導要領が、今年度中にも告示されようとしています。今回の改訂では、情報化やグローバル化等、変化の激しい時代の中、未来社会の担い手となるための必要な知識・能力を確実に身に付けていくことがこれまで以上に強く求められています。特に、持続可能な開発のための教育（E S D）を例に挙げて、子どもたち一人ひとりが、自然環境や地域の将来等を自らの課題として捉え、そうした課題の解決に向けて自分ができることを考え、多様な人々と協働し実践できる必要性をも示しています。

そのような中、本校では、平成 24 年度からユネスコスクールの認定を受け、これからの日本や世界・地球に目を向け、持続可能な開発のための教育（E S D）を念頭においた教育活動を推進してきました。具体的には、蔵持地区の人・もの・自然・文化・歴史とのつながりを重視した学習、すなわち、自分たちとの関連が深く、自分たちで学習を深め、行動化に移しやすい「地域に根ざした学習」に取り組むことで、地域（蔵持、名張、三重）を好きになり、誇りをもち、地域の課題を今すぐに解決する未来志向の子どもたちを育てることができると考えて、この 2 年間研究を進めてまいりました。

本日、皆様方にご覧いただく授業では、「地域に根ざした学習」の教材に「どのように子どもたちと出合わせ、学びに火をつけるのか。」また、「子どもたちの学ぶ意欲の火を燃やし続ける指導方法の手立てはどうすればよいのか。」という研究の視点をもとに展開しています。

研究を進めることで、新たな課題を見出し、その都度、修正等を加えながら、試行錯誤を繰り返しながら取り組んでいるところです。皆様方からの忌憚のないご意見・ご指導を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、本校の研究を日頃より支えていただき、ご指導いただいております、奈良教育大学の中澤静男先生、東京都江東区八名川小学の手島利夫校長ならびに名張市教育委員会学校教育室の皆様方に深く感謝とお礼を申し上げますとともに、本日お越しいただいたすべての方々に心より感謝申し上げます。

平成 28 年 11 月 15 日

名張市立蔵持小学校
校長 谷口 雅彦

II 研究の概要

1. 研究主題

「自ら課題を見つけ、仲間とともに解決する子どもの育成」

～学びに火をつける ESD の視点に立った授業～

2. 研究主題設定の理由

本校の児童は、自分の考えたことや気持ちを伝えることが苦手な子や、伝えることができても、友だちの思いや考えをしっかりと聞いて受けとめることができにくい子もあり、コミュニケーション能力の育成が課題の一つであると考えられた。また、与えられた課題に対してはまじめに取り組み、進んでみんなと協力しながら課題に取り組むことができる子は多いが、自分たちで課題を見つけ、多面的・総合的あるいは批判的に課題について考え、さらに深く課題を解決し、行動していこうとする力は、まだ弱いところがあった。

また、全国学力・学習状況調査の結果から見えてきた課題として、学習して得た知識や技能を応用したり、活用したりする力は高いとは言えない。さらに、考えたことをもとに自分がどういうことをしていけばいいのかを判断し、主体的に行動していく力も弱い面がある。

本校は平成 24 年にユネスコスクールに認定され、ESD (持続可能な開発のための教育) の視点を取り入れた学習活動を展開してきた。ESD の概念を取り入れることは、子どもたちに「批判的に考える力」「未来を予測して計画を立てる力」「多面的・総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」「進んで参加する態度」といった問題解決に必要なさまざまな能力・態度を身に付けることにつながると思われる。このことは、学習指導要領でも示されている「生きる力」の育成とも通じている。

このようなことから、本校児童の課題を克服するとともに、今日的な教育課題に向かう力を育成するために、昨年度から、生活科・総合的な学習の時間を中心に「自ら課題を見つけ、仲間とともに解決する子の育成」をテーマに、ESD の視点を取り入れた研究を行うことにした。

そして、本校の児童の課題克服に向けて ESD の視点を取り入れるだけでなく、子どもたちが興味・関心を持ち、自分たちで「調べてみたい」「やってみよう」と思うような(学ぶ意欲に火をつける)課題や、課題に対して工夫して追究し続ける(学ぶ意欲の火を燃やし続けるための手立てについても合わせて研究することにした。課題のあり方やそれを追究し続ける手立てについて研究することで、より子どもたちの、課題発見能力、課題解決力、思考力、判断力、行動力を高めることができるのではないかと考えたからである。

さらに、学習の柱として「地域に根ざした学習」を取り入れることにした。蔵持の人・もの・自然・文化・歴史とのつながりを重視した学習、すなわち、自分たちとの関連が深く、興味・関心を持って、自分たちで学習を深め、行動化に移しやすい題材に取り組むことで、学ぶ意欲に火が付き、火を燃やし続けることができ、結果として子どもたちの弱みの克服に結びつくと考えた。また、地域に根ざした学習を通して、地域(蔵持、名張、三重)を好きになり、地域のよさを見出すことによって、地域の課題を今すぐ解決したいと行動する未来志向の子どもたちを育てることができると考えたのである。

3. 研究の仮説

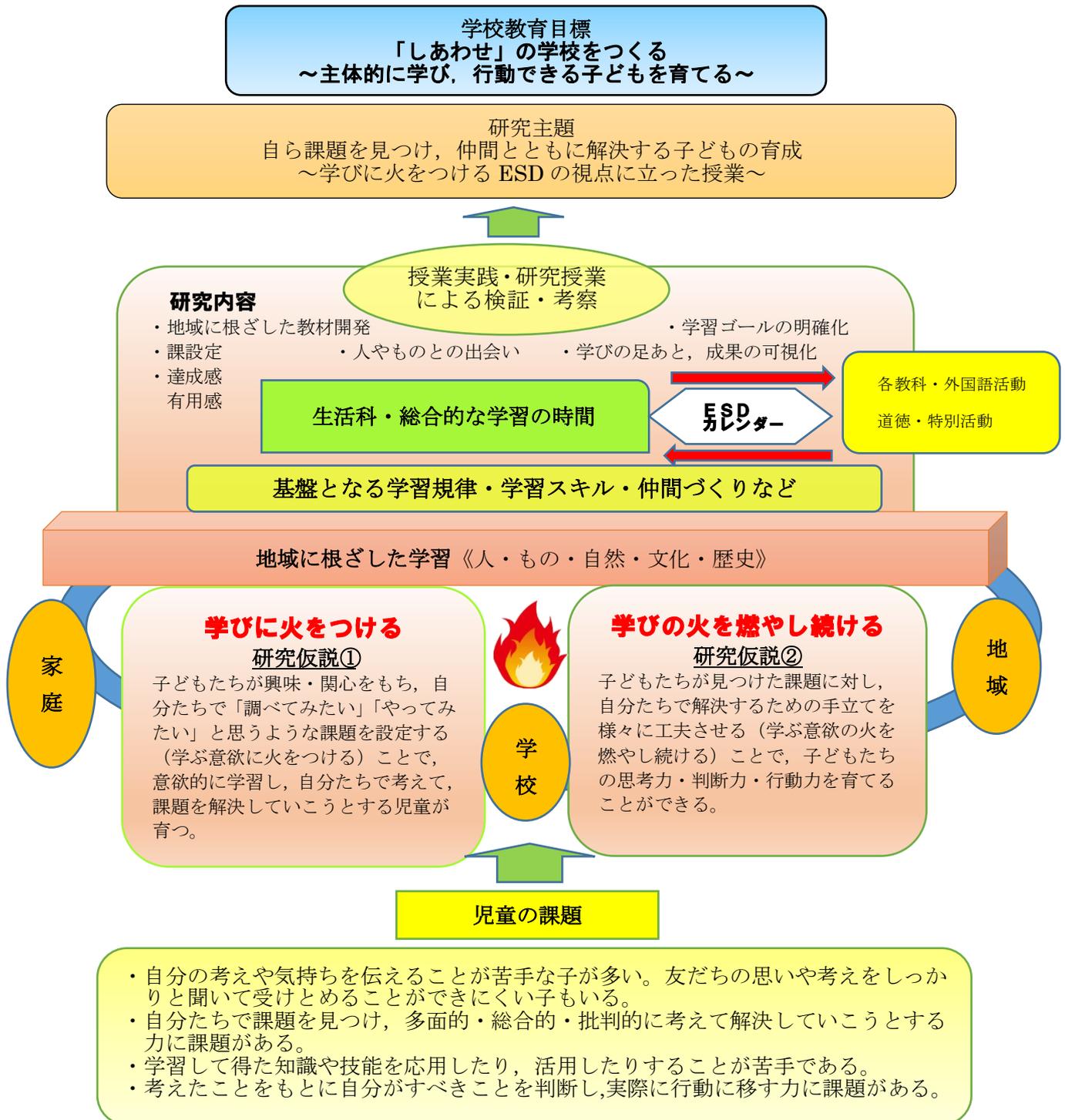
★【仮説①】

子どもたちが興味・関心をもち、自分たちから進んで「調べてみたい」「やってみみたい」と思うような課題を設定する(学ぶ意欲に火をつける)ことで、意欲的に学習し、自分たちで考えて、課題を解決していこうとする児童が育つ。

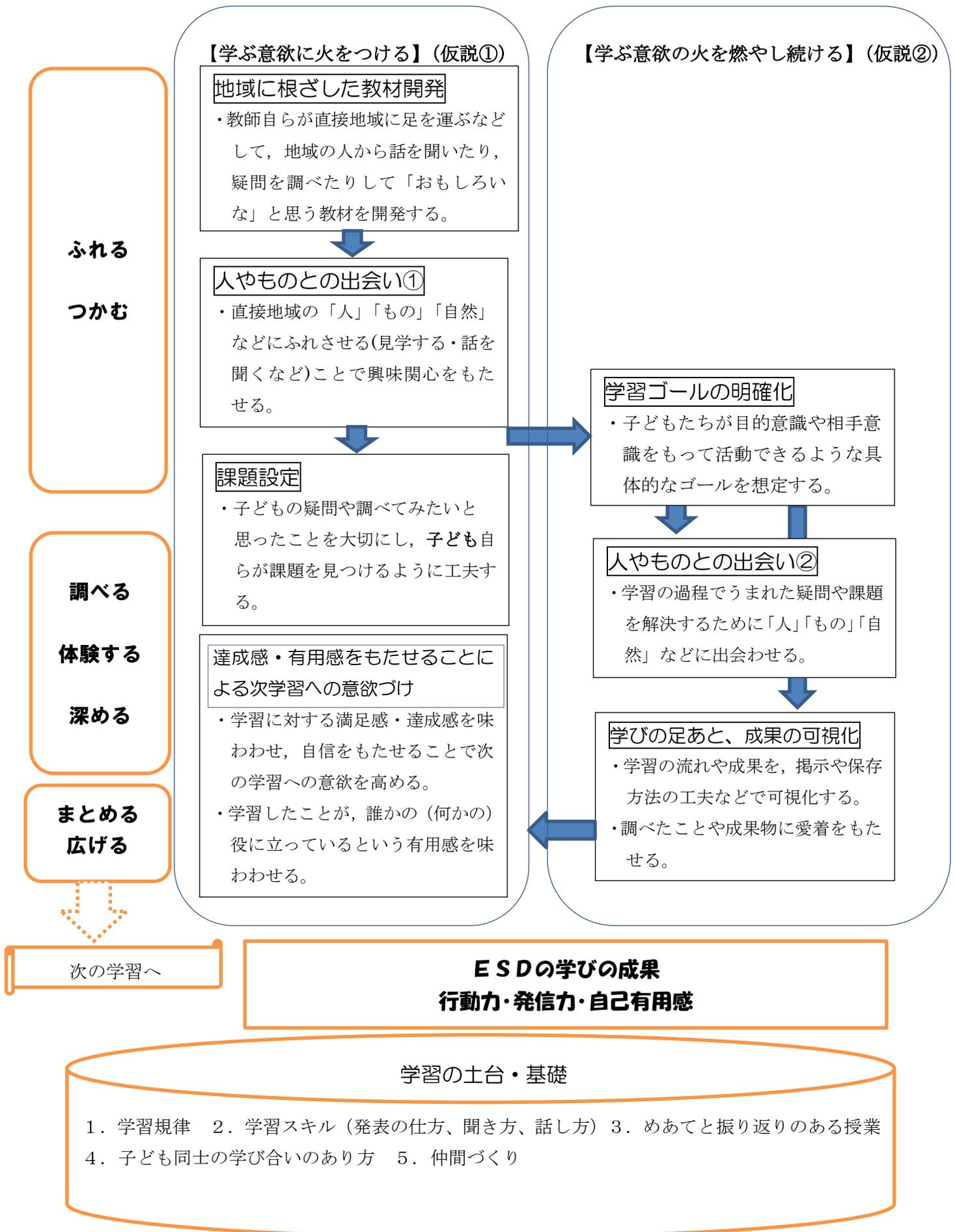
★【仮説②】

子どもたちが見つけた課題に対し、自分たちで解決するための手立てを様々に工夫させる(子どもの学ぶ意欲の火を燃やし続ける)ことで、子どもたちの思考力・判断力・行動力を育てることができる。

4. 研究の構想



5. 研究内容



Ⅲ ESDの視点について

ESDの視点には、教員側が考慮すべき「教材開発におけるESDの視点」と「学習指導におけるESDの視点」があると考えている。また、子どもに身に付けさせたいESDの視点やESDで育てたい行動力について研究してきた。

(1) 教材開発におけるESDの視点について

国立教育政策研究所は「持続可能な社会づくり」の構成概念として下の表を提示している。

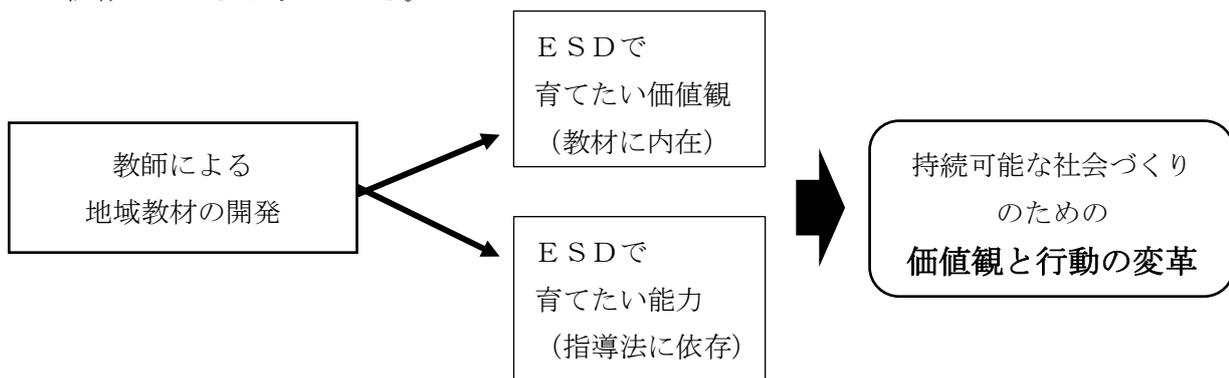
	①多種多様な要素からなる視点	②互いに作用し合う視点	③ある方向へ変化している視点
(1) 人を取り巻く環境（自然・文化・社会・経済など）に関する概念（実態概念）	「多様性」	「相互性」	「有限性」
(2) 人（集団・地域・社会・国など）の意思や行動に関する概念（規範概念）	「公平性」	「連携性」	「責任性」

- ◆地域の自然環境や社会環境を観察し、そこに多様性が乏しかったり、互いの関わりが少なかったり、無限にあることが前提になっていたりしたとき、そこから課題を見いだすことができる。
- ◇地域の自然環境や社会環境を観察し、多様性や相互性、有限性を見いだせたとき、そこに地域のよさを見いだすことができる。
- ◆人や集団の活動や意思について考察し、それが時間的にまた空間的に公平でなかったり、色々なものの連携を断ち切ろうとしていたり、無責任であったりしたとき、そこに課題を見いだすことができる。
- ◇地域の人や集団の活動や意思について考察し、そこに公平性や連携性、責任性を見いだすことができるとき、そこに子どもに伝えたい地域のよさを見いだすことができる。

これらの教材開発におけるESDの視点に基づいて教材開発したものが、本校の研究仮説①「子どもの学びに火をつける課題のあり方」である。

(2) 学習指導におけるESDの視点

本校では、ESDの授業設計を下図のようにとらえており、ESDで育てたい能力が学習指導方法に依存していると考えている。



そこで、ESDで育てたい能力（持続可能な社会づくりの担い手に必要な能力）を国立教育政策研究所の「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」及びOECDのキー・コンピテンシー、「生きる力」などから、次のように4つに整理した。

- ①クリティカル・シンキング（批判的思考力・代替案の思考力）：課題発見力
- ②システムズ・シンキング（多面的・総合的思考力）
- ③コミュニケーション力
- ④長期的思考力・行動力（データを分析し未来について考え行動する。）

この4つの能力を育てる具体的な学習指導方法が、本校の研究仮説②「子どもの学びの火を燃やし続ける学習のあり方」である。

（3）子どもの身に付けさせたいESDの視点

能力があっても、「〇〇すべきだ」「〇〇した方がいい」といった価値観が育っていないと、せっかくの能力も発揮することができない。この価値観について、国立教育政策研究所の「規範概念」を用いて整理した。

- ①公平性：世代間・世代内の公正，人権・文化の尊重，環境配慮，多様性の尊重
- ②連携性：協力する態度，つながりの尊重，非排他性，機会均等
- ③責任性：進んで参加する態度，リーダーシップの向上

この「公平性」「連携性」「責任性」を本校では子どもに身に付けさせたいESDの視点とし、それらを身に付けることができる地域教材の開発に取り組んできた。

（4）ESDで育てたい行動力

行動力を促すきっかけは、「切実性」であると考え、子どもにとって切実性のある地域教材の開発を行ってきた。地域教材を通じた学習域の本物との出会い、地域人材との交流を通して、自分の地域を知り、地域を大切に思う心を育てる。また、地域の課題を何としても今すぐ解決したいと思えるような単元展開を行う。これによって培われた地域を大切に思う心が、地域の一員としての当事者意識、地域の次の世代の担い手としての当事者意識を養うことにつながると考えている。

VI 研究のまとめ

1. 成果と課題及び考察

<仮説①に関わって>

子どもたちが興味・関心を持ち、自分たちで「調べてみたい」「やってみよう」と思うような課題を設定する（学ぶ意欲に火をつける）ことで、意欲的に学習し、自分たちで考えて、課題を解決していくようにする児童が育つ。

以上の仮説から、地域に根ざした教材開発を行った。

1年 地域の方との昔あそび	4年 地域の交通安全対策
2年 地域の探検や野菜作り	5年 地域の田での米作り
3年 地域のたからもの探し	6年 オーストラリアの友だちへの地域紹介

[成果]

- ・地域の身近な場所（蔵持市民センターや長慶寺等）、人（地域身近な場所に携わる人や学習ボランティア等のゲストティーチャー）、自然（蔵持地域の田畑等）との出会いが学ぶ意欲や地域への愛着心につながった。特にゲストティーチャーと出会い、地域の様々な取り組みを見たり、地域の方々の思いを聞いたりしたことで、「長慶寺のお地蔵さんについてもっと知りたい」「もっと話を聞きたい」など、地域への興味・感心が高まり、地域とのつながりが深まった。
- ・地域の道路・交通状況を調べることを通して、自分たちが暮らす地域を少しでも安全なまちにしたいという願いから、行政へのはたらきかけを発案するなど、具体的な方策を考えることができた。
- ・蔵持の農業を調べ、体験することを通して、蔵持の地域のよさや、蔵持だけではなく、名張のよさを他の地域に発信していくことができた。
- ・自分の興味・関心を持つ遊び、野菜、地域の宝物や課題を選んで活動を始めたり、自分の住む町や国を他国と比較したりすることで、自分から学びたい気持ちを引き出すことができた。

[課題]

- ・地域のことを系統的に学ぶためには、誰がどの学年を担当しても取り組むことができるように、各年度の取り組みの有効性を調べて教材を蓄積していく必要がある。
- ・教師自身が楽しんで取り組める新たな教材開発のために、ボランティアの方の活用等日頃から地域との関わりをもつことや、情報を収集することが必要である。
- ・ESDの視点に立った学習を進める中で、子どもたちの価値観や行動の変容をどのように評価するかを考えていく必要がある。

[考察]

子どもたちが、意欲的に学習に臨み、自ら課題を解決していくためには、動機づけと「切実性」が必要である。今回の研究を通して、子どもたちの心や行動に成果で述べたような変容があった。

このように子どもたちが取り組めたのは、教材が、子どもたちにとって身近なものであり、「切実性」のあるものであったからだと考える。

<仮説②に関わって>

子どもたちが見つけた課題に対し、自分たちが解決するための手立てを様々に工夫させる（子どもの学ぶ意欲の火を燃やし続ける）ことで、子どもたちの思考力・判断力・行動力を育てることができる。

以上の仮説から、学習ゴールの明確化、人やものとの出会い直し、学びの足あと・成果の可視化に留意した実践を行うことで達成感や有用感の向上を図った。

[成果]

- ・他者に伝える、収穫した物を食べるといった学習のゴールを明確にすることで、目的や楽しみをもって活動できた。また、自分の学びが他者へ働きかける意味のあるものであることを知って学習に取り組めた。さらに、ESDカレンダーの活用により、他教科と関連づけることで、より学びが深まった。
- ・学びの中で生まれた疑問や課題を解決するために、再びゲストティーチャーと出会うことができた。自主的にゲストティーチャーを訪ねる子もいた。地域の人との出会いによって地域の新しい発見や自分の生活の見直しができた。
- ・学習から得た成果を資料や掲示物など、様々な形で記録し、視覚化することで、学びの振り返りができるとともに、達成感や満足感を味わえた。また、自分たちの学びを発信し、他者からの評価やヒントを得ることで、「次はこんなことも調べてみよう」「課題を解決するためにこんな方法はどうだろう」など、子どもたちの主体的な学びの姿が見られ、次への学習の意欲の高まりを感じることができた。

[課題]

- ・人とのつながりが重要となるため、系統的に取り組むために学習ボランティアの方を始めとする人材のデータを継承したい。また、教材や人材とともに成果物（子どもの変容が分かる感想等）についても次の年度に継承していきたい。
- ・活動の基盤となる、学習規律、コミュニケーションのスキル、仲間づくりが重要である。
- ・人とつながったり、学んだことを伝えたりするための「聞く・話す」コミュニケーション力や、自分の考えを深めるための「書く」ことについてもさらに力をつけていきたい。
- ・アンケートや、インタビュー等で自分たちが集めて得たデータを分析する力も必要となる。

【考察】

課題を解決するために、「もっと調べたい」「こんな活動を取り入れてはどうだろう」「自分たちが学習したことをもっと地域の人にも知ってもらいたい」など、学習を進めていくにつれて、子どもたちの考えに広がりや深まりが見られた。

今回の研究のように、1つの単元について長時間かけて取り組むためには、いかに学ぶ意欲を持続させるかが重要である。

今回の実践研究を通して、学ぶ意欲の持続化に有効であると考えられるものを3つ明らかにすることができた。

1つ目はゴールの明確化である。学習のめざすべきゴールを明確にし、常にそのゴールを意識させること（自分たちは何のために学習しているのか）が大切である。このことから、めざすべきゴールが、いかに子どもたちにとって魅力的なものであるかが重要な要素となると考える。

2つ目は地域の方々との出会いである。学習の過程において地域の方々とは幾度か出会うことで、その方々とのつながりが深まり、地域へのさらなる愛着が生まれ、より学びを深めることができたことから、地域教材・人材をいかにうまく活用するかということも、学ぶ意欲を持続させる上で大切であったと考える。

3つ目は学びの足あとの活用である。発表等で自分たちの学びの成果を他者に伝えたり、他者から反応されたりすることで、子どもたちが「何について学んでいるのか」を再確認することができる。また、ポートフォリオ等でこれまでの学びを振り返り、途切れのない学習を持続するため、学びの足あと＝成果物を活用することは大変有効である。

地域に根ざした教材を通して、地域の方から学び、さらには様々な手立てを講じることで、子どもたちは課題を自分の身近にある切実性のあるものとして捉え学習することができた。

今後も子どもたちが学ぶ意欲の火を燃やし続けられるように取り組んでいきたい。

2. まとめ

子どもたちにとって、地域は自分たちを成長させてくれる大切な場所である。自分たちとの関連が深く、自分たちで学習を深め、行動化に移しやすい「地域に根ざした学習」に取り組むことで、子どもたちは、「蔵持にはこんな文化があったんだ」「もっと蔵持のことを調べたいな」「どうしたらもっと蔵持を安全なまちにできるだろうか」「蔵持のいいところを他にも発信したいなあ」など、蔵持のよさに気づくとともに、地域を大切に思う心が育ってきている。

また、ESDの視点に立った授業を行うことで、子どもたちは友だちの言ったことに対して批判的に考えたり、一つの課題に対して多面的に考えたりして、未来を見据えた思考をすることが少しずつではあるができるようになってきたと感じている。

今回の研究により、私たちは、子どもたちの学ぶ意欲にいかに関与させるか、また、その学びの火をいかに「燃やし続けるか」を合い言葉に取り組んできたが、この学びの火をこれからも絶やさぬように取り組んでいきたい。

最後に、研究を推進するにあたり、ご支援・ご協力をいただいた地域の方々に感謝するとともに、今後も、引き続き地域の方々とのつながりを深め、子どもたちの豊かな学びと健やかな育ちに向けて取り組んでいきたい。